【書評】

白川昌生
『贈与としての美術』
2014, 水声文庫

佐　山　一　郎†

1948年に北九州市戸畑で生をうけた著者は、フランス、ドイツで哲学と美術を学び、1983年に帰国。国内外の美術館やギャラリーで作品を発表し、現代美術史に関する研究、著作も活発な美術作家である。

2016年秋には、長崎・爆心地から戦後日本の彫刻の意味を問い直す「彫刻の問題」展に出展している。さらには愛知県で開催され一時中止になった国際芸術祭『あいちトリエンナーレ2019情の時代』の企画展「表現の不自由展・その後」に造形作品を出展しただけではなく、抗議電話への対応と抽選で選ばれた来館者への解説も引き受けている。

2014年3月に刊行された本書の著者略歴欄では、地元にある群馬県立女子大学と前橋工科大学で講師を勤めていることが記されていた。

数年前の著作をあえて俎上に載せたのは、贈与交換の先駆的研究で名高いマルセル・モース（1872～1950）『贈与論』の理論的影響と発展形を確かめたかったからである。全4章からなるB6判上製の本書帯コピーにはまずこうある。

〈美術が《商品》であるとともに、未来への《贈与》であることを, / 未開社会における《クラ交換》, モースの『贈与論』, / シュタイナーの経済理論等に拠りながら力強く主張しつつ, / 美術のみならず, 政治・経済・文化のすべてが, / 社会そのものが, 《芸術》であるような未来へ向けて, / 現在の腐朽した美術の在り方を根柢から問い直す。〉

十全な承認を得てるとはいえないルドルフ・シュタイナー（1861～1925）の名に少し意外な思いをいだく向きもあるだろう。哲学と美術市場との関係を結ばせる硬質かつ猛研究の論考である上に、各章ごとのタイトルもない。未熟な読者には辛い孤立無縁の気配漂う思想書なのである。

そこで一計を案じ、簡便な人名索引を作りながら読み開くことにした。それらはおよそ以下のようになる。

第1章人名
カール・マルクス/2、4章再出、デヴィッド・ハーヴェイ/4章、ピカソ、モネ、マネ、ジャック・ラカン、レヴィ＝ストロース/2章再出、フロイト/2章再出、ジル・ドゥルーズ、佐伯啓思、大澤真幸、ブロニスワフ・マリノフスキー/2章再出、マルセル・モース/2章、3章、4章再頻出、ピエール・クラストル、今村仁司/2章再出、ミシエル・パノフ/2章再出、ダーウィン、ヘーゲル。

貨幣の秘密を整理したこの章の最後で著者は、

† 立教大学社会学部兼任講師
sa_y@j07.itscom.net

「私たちは、非常に迂回した径路をたどりながら、文化的生産物の価値の誕生の歴史、それと貨幣との関係を考られる所にまでようやくたどりついたのではないかと思う。/クラ交換は、はるか過去に消え去った活動ではなく、一九九〇年代の現在も南太平洋では行われている」と述べ、モースに関連した1990年代以降の諸研究に基づく第2章へと誘う。

第2章では、主としてルロワ＝グーラン、ベンヤミン、『贈与の謎』の著者ゴドリエらにアクセントがおかれ、中でもベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』（1935〜36年）中の「〔……〕芸術は儀式に基づくかわりに、必然的にある別の実践、すなわち政治に基づくことになる」〔ベンヤミン・コレクション一巻『近代の意味』所収〕浅井健二郎、久保哲司訳、ちくま学芸文庫、595頁）――に対して白川は異論を挟む。曰く、「しかし政治こそは、まさに儀式のひとつの形態ではないだろうか。政治を儀式よりさらに高度に発達し、進化した合理的な活動形態だなどと考てしまうならば、私たちは、歴史の中で何度も出会うことのある「政治の非合理」、「野蛮の歴史」というものの意味を理解することができないだろう」。

この章での白川の試みは、一般の商品と異なる美術作品の価値形成歴史プロセスに人類学的な観点をくみこみ、それを証明することだった。たしかに経済学的な視点だけでは本来の「聖なるもの」とつながる「貴重なもの」という美術作品ならではの側面を理解することができない。

ヴァルター・ベンヤミン、今村仁司＆今村真介（今村父子）、イマヌエル・カント、ミシェル・フーコー、ピエール・ブルデュー/3章再出、ジークムント・フロイト、ベルナール・スティグレール/4章再出、プラトン、東浩紀、アンドレ・ルロワ＝グーラン、プラトン/4章、ジェームズ・ギブソン、モーリス・ゴドリエ、アネット・ワイナー、ジャン＝ジョセフ・グー、ガリレオ・ガリレイ、ジョゼフ・ギース、フランシス・ギース。（第2章人名）

第3章は、交換活動の規範成立上必要な「第三の人物（シャーマン、呪術師）」ないしは「第三の媒介物」としての貨幣の言及から始まる。問われたのは、ブルデューの『ディスタンクシオンⅠ』と『芸術の規則1』での論考を活用した芸術作品の価値生成プロセスだった。価値にまつわる規範、制度、歴史などの検討によってたどりついたのは、「象徴資本と経済資本は十分に交換可能な要素を相互の制度で芸術作品に対して持っている」（白川）という認識である。ただ貫徹された制度にとどまるわけにはいかない。貨幣そのものが商品となってすべてを統括する資本主義経済の直面する難題を前に、承認されていないシュタイナーの「三分節化社会機構論」が再検討される。

スラヴォイ・ジジェク、マルセル・デュシャン、ボリス・グロイス、エミール・ゾラ、ドレフュス、マネ、ピエール・ジョゼフ・プルードン、ナポレオン3世、ギュスターヴ・クールベ、ボードレール、稲賀繁美、リンディ・ネアン、フランソワ・ベンアモウ、ダニエル・コーエン、サンディ・ネアン、ヨーゼフ・ボイス／4章再出、ルドルフ・シュタイナー/4章再頻出。（第3章人名）

圧巻ともいえる最終第4章で白川は、「一九二二年に発表されたシュタイナーの『国民経済講座』がマリノフスキー、M・モースの著作と同時代に生まれ、こうした思考は世界的危機を背景に現れてきたのだということを忘れないでおこう」――と前置きしている。シュタイナーの経済理論を救出するかのように追いつつ贈与との連絡路を探してゆく。

ここでの特色は、マルクスの受動的な想定とは違う「労働」観を強調した点だろう。そして白川は、シュタイナーの提示する概念「才知（精神）」に光を当てる。

モースの人類学的アプローチとシュタイナーの

経済学的アプローチはいずれもが贈与に注目している。貨幣や市場中心の活動ではない贈与の世界が古代から拡がっていて、それがあるからこそ経済活動が動いているという立場に白川は立つ。芸術活動においても贈与は出発点にあり、（商品化とは逆の方向である）贈与実践の好例に、そもそもは無銘とも呼ぶべき存在だったヘンリー・ダガー、フェルディナンド・シュヴァル、ミロスラフ・ティッシー、（＊今なら乳母であったストリート写真のヴィヴィアン・マイヤーも？）らのアウトサイダー・アートを白川は「はるかな未来へ向けての贈与なのだ」と主張し合点がゆく。

新たな人文知を希求する学際的挑戦の最後で、著者は「［……］芸術活動、芸術作品がモースのいう「全体的社会的事象」の中で贈与として活動して行く姿を私は見とどけたい」「なぜなら人がこの世に生をうけ、生きて死んで行く事実こそが、（反対贈与が不可能な――評者））自然、世界、死者からの贈与だとしか言えないからだと私は思っている。不思議さ以上に、この絶対的受動性という事実への認識が、贈与活動を、これまでの数万年にわたる人の社会的活動をつくり出してくる原動力になってきたからである」と結んでいる。

シンボル交換の根幹を形成する贈与活動の持つ重要性について誰かに熱く語ってもらえた記憶が、実のところ評者には一度もなかった。あえていってしまえば、学術界の思いとは裏腹に『贈与論』の一般的な認知度はきわめて低い。白川がそうであったように、経済学の専門家から芸術活動の価値形成について蒙を啓かれた経験もなかった。このこと自体が私たちが単純な市場中心の視点だけにいかに毒されてきたかを物語っている。

アダム・スミス、ニコラス・ルーマン、シルビオ・ゲゼル、アネット・ワイナー、ハンス・アビング、松宮秀治、山本和弘、アマルティア・セン、ヘンリー・ダーガー、フェルディナンド・シュヴァル、ミロスラフ・ティッシー、アーリマン、ルシファー、キリスト。（第４章人名）